

Wolfologyに関する授業研究—3—

——受講生は先入観を如何に変えて行ったか——

A Study of the Effect of Lectures about Life of the Wolf —3—
How Students Change Their Prejudices

児童学科
Dept. of Child Studies

福本 俊
Shun Fukumoto

抄 録 本学の通信教育課程の学生を対象にして、オオカミに対する偏見が、現実のオオカミの暮らしに関するドキュメントに接することによって、如何に変容するかを追跡した。一週間の演習とグループディスカッションを通じて受講生たちは、従来のオオカミに対するネガティブなイメージを、よりポジティブなイメージへと大きく変容させていた。最も大きく変わった印象のベスト3を挙げれば、敵対的な印象から友好的な印象に、悪い印象から良い印象に、残忍な印象から情け深い印象に、と言うものであった。オオカミに関する新しい事実に触れたときに、一人一人の受講生が、どのように印象を変えて行ったかについて、丁寧に追跡することが次なる課題である。

キーワード：オオカミ学，先入観，情報提示，意味微分法，印象の変容

Abstract This article reports the changing process of prejudice towards wolves on the part of students in the Correspondence Course of JWU. The students were presented with some documents about the real life of the wolf. They changed their impressions about the wolf through a one-week summer seminar and group discussions. The direction of the changes were from negative to positive. The best three of the changes were from hostile to friendly, from bad to good, and from insincere to sincere. To follow carefully the individual process of change is the next step of this study.

Keywords : wolfology, prejudice, information presentation, SD method, impression change

1. 問題

昨年度の本紀要に於いても述べたように、筆者の研究テーマの一つが「DISCRIMINOLOGY (偏見学)」である。文字通り「偏見・先入観」を対象としている。偏見・先入観は簡単に形成され、そして容易には変化しないものである。謂わばその個人や集団に肉体化されている。それは偏見はそれを抱く当人にとって最も簡単な情報処理の仕方であり、大変に楽であるからである。「あの人は〇〇な人だ」と決め付けることができれば、余計な情報を取り入れて自分の確信を態々変更するなどと言う煩雑な作業から解放されるからである。その点から言えば「いじめ」

はこの偏見・先入観の為せる業の典型であろう。決め付ける事ができるから、迷うことなくいじめることができる。部落民・アイヌ・黒人・有色人種など少数者・少数民族或いは肌合いの違う人々への偏見、女性・障害者など弱者への偏見、自らとは全く異質な存在である鬼・魔女への偏見などは、筆者のDISCRIMINOLOGY (偏見学) の対象である。今回取り上げる「WOLFOLOGY (おおかみ学)」も偏見学の最も相応しいテーマの一つである。

2. WOLFOLOGY とは

端的に表現すれば、「not scapegoat, but scapewolf」である。SCAPEGOATとは、キリストの原型とされ

るもので、身代わり・犠牲《聖書》贖罪の山羊：昔ユダヤで贖罪日に人々の罪を負わされて荒野に放たれた山羊（旧約聖書レビ記16章）である。荒野に放たれた山羊はオオカミなどの肉食獣に食べられたと考えられる。これに対して筆者はSCAPEWOLFと言う概念を提唱して来た（日本心理学会第46回大会発表1982）。私共人間は自らの恐れ・憎しみ・不安・悲しみなどを全部オオカミの背中に背負わせている、と言う考えである。

元来、我が国のような農耕民族にあってはオオカミはむしろ農業を護る「神」として崇められてきた。東京の御岳神社や三峰神社などでは現在もオオカミが守護神として祀られている。狩猟も生活の大きな支えとしてきたアイヌの人々にあって、オオカミは「吼える神（ウォッセ・カムイ）」として、敵対するものとしてよりは寧ろ狩の巧みさから神と崇められていた。しかし、狩猟を生活の手段としていた多くの民族は、自らの獲物がオオカミと競合するためにオオカミを敵対するもの・厄介なものとして見做してきた。そしてお定まりのように自分たちを護るためにオオカミに対する偏見—オオカミは残忍な悪者—を作り上げて行ったのである。またそれと共に、その偏見を強めるような物語もまた産み出されて行った。北海道にキリスト教の宣教師がやって来て早速行った仕事は「害獣オオカミ」を撲滅するために全道にストリキニーネ入りの毒饅頭を撒いたことであった。これによりアイヌからは神と崇められていたエゾオオカミは全滅したのであった。その「付け」は今日の北海道経済を酷く悩ましている。オオカミを頂点とする自然の生態系が破壊された結果、エゾ鹿などが野放図に増え、農林業は毎年膨大な被害に見舞われている。今日エコが叫ばれているが、生態学的に言って「最も自然らしい自然」はオオカミを頂点とした生態系である。象でもライオンでもない。我々がこれからも地球で暮らす事を許されるためには、自然を復活させることは基本的な条件である。そのためには様々の偏見・先入観から解放されることもまた必要である。事実、北海道上川郡標茶虹別で20頭近くの森林オオカミと極北オオカミを飼い、やがては全道にオオカミを頂点とした自然を復活させようとの桑原氏夫妻の実に気の永い取り組みが地道に行われている。氏らは自ら運営する「ネーチャースクール」において我々がオオカミについての正しい知識を持つようにと日夜奮闘しているのである。

3. 目的

受講生の「おおかみ」に対するイメージが一週間の授業を通じてどのように変化するか、その過程を明らかにする。

4. 方法

2009年度と2010年度に亘り全く同じ内容・形態の授業を行った。

「(2) 授業期間」以降は2010年度のものを紹介する。

(1) 対象者

日本女子大学通信教育課程・福本担当「児童学演習」
2009年度受講生35名、2010年度受講生39名
合計 74名

(2) 授業期間

2010年8月2日（月）から7日（土）
9：00～12：30

(3) 提示教材

1) テキスト

『オオカミよ、なげくな』
（ファーレイ・モウワット著小原・根津訳、
1977、紀伊国屋書店）（＊1）

2) 視覚教材

VTR「野生発見の旅」NHK 1997. 5. 3（＊2）；
「昼時日本列島」NHK 2000. 8. 12（＊3）；
「虹別桑原牧場」福本撮影2002. 8. 14（＊4）

3) 印刷教材

朝日新聞2002. 7. 1「オオカミ伝説山里に息づく—奥多摩に幻の姿追う」（＊5）；Piagetの「自己中心性」（第一法規「現代子ども大百科」p.0299）；正岡子規「病床六尺」（中央公論社「日本の文学」15）；フランス科学犯罪捜査学校の標語「眼は、それが捜し求めているもの以外は見る事ができない。捜し求めているものは、もともと心の中にあったものでしかない。」

(4) 授業運営

一日当たり40ページを目途に、テキストを5回に分ける。前日にそのテキスト部分を渡して読んでもらう。当日はその日の「学習のうと」を各自に手渡し、読んでおいた内容を基に「のうと」

を作成する。その後、各自の「学習のうと」を持ち寄り、グループに分かれて討議を行う。その後再度集合してグループ間の発表を行う。グループ討議の時間に前日提出の「学習のうと」を各自に返却する。従って各自の手元に「学習のうと」のファイルが徐々に作られていくという仕組みである。オオカミに対する印象・態度の変容の過程を詳しく追跡するために前以って読まれる事態を避けた。たまたま、本書が絶版であったこと、また、この本を以前に読んだことがある受講生が皆無であったことは、筆者の研究目的上好都合であった。

1) グループ分け

受講生名簿の番号順に1～6の番号を振っていく。これによって通信教育課程入学までの経歴・年齢などにおいてより等質化された6グループが構成された。従って、1グループ6～7名である。

2) オオカミに関するSD法

初日と最終日に行った評定法である。初日の授業開始冒頭「おおかみ」を刺戟語とした46の形容詞・形容動詞対（以後形容詞対）に対する7段階評定を依頼し、従来までのオオカミに対するイメージを披瀝してもらった。形容詞対はオスグッド（Osgood,）の提案する意味空間の4つの評価基準、即ち、論理的評価（正しい—不正な；よい—わるい；すぐれた—おとった；立派な—ひどい；役立つ—役立たぬ）、感情的評価（陽気な—陰気な；静かな—騒がしい；おおらかな—卑屈な；理性的な—感情的な；誠実な—不誠実な）、力動性評価（すばやい—のろい；はやい—おそい；鋭い—鈍い；若い—老いた；勇敢な—臆病な）、巨大性評価（大きい—小さい；長い—短い；強い—弱い；深い—浅い）に基づいたものである。5日間の授業で、オオカミに関する「事実」（良いイメージが圧倒的に多い）が描かれているテキストや補助教材を経験した後の最終日、同一のSD法を行った。両者の差が1週間の授業での学びの効果とすることができよう。7段階の評定は、尺度の左端が1点。右端が7点である。

3) 学習のうと

B4版仕立てのシート。1. 疑問点など、2. オオカミについての新しい知識など、3. オオカミについて変化した印象など、の3つの部分に仕切られている。

4) 従来までのオオカミに関するイメージなどの調査

「10. 08. 2現在のオオカミに関するあなたご自身

の感想・印象について述べてください。」とした、B4版仕立ての質問紙。自由記述を依頼した。

5) 本授業・児童学演習の評価テスト

最終日に施行。課題1. テキスト・プリント・VTRなどから「あなたが学んだこと」3点以内に簡潔に述べてください。課題2. 今回の演習を通じて「あなたの裡（うち）にある偏見について気付かされたこと」について述べてください。

(5) 授業日程

1) 2010年8月2日（月）

「2010. 8. 2現在のオオカミに関する感想・印象」；刺戟語「おおかみ」のSD法；テキストに関するグループ学習（p.7～p.39）；

「学習のうと」の作成・提出

2) 2010年8月3日（火）

テキストに関するグループ学習（p.40～p.81）；「学習のうと」の作成・提出

3) 2010年8月4日（水）

テキストに関するグループ学習（p.82～p.123）；視覚教材上映VTR「野生発見の旅」NHK 1997. 5. 3, 「昼時日本列島」NHK 2000. 8. 12, 「虹別桑原牧場」福本撮影2002. 8. 14；

「学習のうと」の作成・提出

4) 2010年8月5日（木）

テキストに関するグループ学習（p.124～p.161）；印刷教材提示 朝日新聞2002. 7. 1「オオカミ伝説山里に息づく—奥多摩に幻の姿追う」；「学習のうと」の作成・提出

5) 2010年8月6日（金）

テキストに関するグループ学習（p.162～p.206）；「学習のうと」の作成・提出

6) 2010年8月7日（土）

「おおかみ」についての2回目のSD法；プリント教材—Piagetの「自己中心性」・正岡子規「病床六尺」・フランス科学犯罪捜査学校の標語についてのグループ学習；「学習のうと」の作成・提出（＊6）

(6) 授業日程ごとのテキストの概要（昨年度のものをほぼ1/2に縮約（大野1999））

第1日目：8月2日

ナマズにひかれて（p.7～p.17）：やがては生物学者となる著者の人生の切っ掛けとなったナマズ事件と、その後の大学での学び。カナダ政府の命を受

けオオカミの実態調査に極北のバーレンランド（荒地）に発つに至った経緯。

オオカミジュース (p.18～p.25)：空軍輸送機でチャーチルへ。そこでバーレンランドまで著者を運んでくれるパイロットを探しつつ、オオカミの専門家を自認する色々な人からオオカミについての情報を収集（殆んどが根も葉もない噂である：福本註）。エスキモーの妊婦は襲わない・四年ごとに脱皮を起こす特殊な病気に罹る・アメリカの空軍基地ができてからオオカミの数がやたらと増えた、など従来の科学文献には載っていないものが多い。ヘラジカ印のビールに基地の兵隊から入手した不凍液用アルコールをたっぷり入れたオオカミジュースなるものとも出会う。

オオカミを求めて (p.26～p.31)：五月末、1938年製の空軍練習機を操縦する元英国空軍パイロットと出会い、オオカミを求めて出発。積載した荷物が重いために三百フィート以下と言う低空飛行の末、チャーチル北西三百マイル辺りの凍った湖に漂着。

極北からの通信 (p.32～p.39)：湖上に荷物を山積みにしたまま、そこを基地とする。バーレンランドの真っ只中らしい。「肉食獣管理局」と連絡を取ろうとするも携帯した送信機は使えずお手上げ。そのうち声などから推測すると四百に近いオオカミがやってくる模様。カヌーの下に潜り込む著者。隙間からの観察の後、カヌーを持ち上げた末に見たものは、一人のエスキモーの青年と十四頭の強そうなエスキモー犬であった。

第2日目：8月3日

出会い (p.40～p.48)：エスキモーと白人の混血青年で罫罫師マイクと出会い数マイル先の彼の小屋を常設基地とする。マイクは著者所有の機材を気味悪がって居なくなってしまいオオカミと出会う手筈がわからないまま、小屋の周囲から調べることにする。小屋の周りには夥しいカリブーの骨が敷き詰められ小屋から離れるに連れて骨が少なくなっていく。夜、子犬の鳴くような声。マイクの犬と思い、その声の主を辿っていく。予期せぬオオカミとの出会い。睨み合いのあと、低く飛ぶようにオオカミは消え去った。

巣穴発見 (p.49～p.57)：今さっき遭遇したオオカミの姿一幅広く白い首周りの毛・黄褐色の目・がっしりした頭・飛ぶような動き・子馬ほどもある全体の印象などが蘇る。翌朝、昨日遭遇した地点

まで辿る。ライフルなど重装備。二匹のオオカミが鬼ごっこをしながら著者の近くに。穴の窪みで身を潜める著者。思わず丘の上を駆ける著者が雄のオオカミに見つけられるがオオカミは著者を完全に無視して巣穴の上で悠然と昼寝をし始める。自分の失態でオオカミに逃げられる事を配したが、その心配がなくなりほっとする著者。

観察開始 (p.58～p.65)：身の危険を感じなくなった著者。高性能の望遠鏡と三脚だけを持ちオオカミのところに。一番高い岩山の後ろに望遠鏡を据え自分の姿を隠しながら辛抱強く狼たちを待ち続ける。午後二時諦めて小用を足そうと後ろを振り向くと、番のオオカミが座っている。観察されていたのは自分であったこと。背後から襲ってこなかったことの二点で心身ともに緊張し小屋に一時退却する著者。人間それも徹底的に技術訓練を受けた人間としてのプライドが否定された著者は挽回するべく翌日巣穴に向かう。巣穴付近では四匹の子どもオオカミがレスリング遊び。太ってちょこんとした耳・狐のような顔・カボチャのように丸い胴体などなどオオカミとかけ離れた様に何んだか判らなかった著者。中の一匹がよたよたと著者の方にやって来たときに警告を発する親オオカミの遠吠え。子どもたちは巣穴の中に。親オオカミを見るためにバランスを崩し山の斜面をずり落ちもがく著者。それを三匹のオオカミがロイヤルボックスの観客の様に並んで愉快そうにこちらを見ている。またもや相手に軍配。ぼろぼろの神経と自尊心を抱えながら引き上げる著者。これまで作られてきた「残忍な殺し屋」のイメージと一晚中葛藤した結果、著者は虚心にオオカミの世界に入り、憶測ではなく現実のオオカミを観る決意をする。

なわばり (p.66～p.71)：オオカミ側に立って観察することを決意。武器は一切持たずできるだけオオカミの近くにテントを張る。望遠鏡をテントの入り口に据え、寝袋から昼夜巣を見張れるように。オオカミは完全に著者を無視。狩猟地への行きかえりテントの脇を無視しながら通い続ける。放浪することは無く、極めて明確な境界を持つ大不動産に定住する生き物である。無視された著者、自分の存在を主張するため、お茶を飲みながらテントの周りに「マーキング」。いつもは無視していたオオカミが著者のマークに出くわし当惑。じっと考えてから自分のマークで著者のマークを消し、自分の地所を元通

りに直して巣に悠然と戻って行ったのであった。

オオカミ式昼寝 (p.72～p.81)：著者の存在が認められ領地は公認された。身の危険が無いことがわかりオオカミ研究に全力が注げるようになった。初めに解ったことは彼らの規則正しい生活ぶり。夕方早く雄が狩に出掛け雌は巣に入り子育てに携わる。昼寝は独特のオオカミ式昼寝。グルグル回って丸くなって寝入る。5分から10分間。狩猟の余剰分の食料の隠し場所は巣から半マイルのところ。オオカミの個性が明らかに。主人はジョージ。妻はアンジェリン。子どもたちの相手役のアルバート叔父。母親は十分に子どもの相手をするが、付き合えない場合は、アルバートを呼び任せる。アルバートは徹底的に子どもたちと付き合い、子どもたちは疲れきって寝始める。このチームワークの見事さよ。

第3日目：8月4日

食べ物 (p.82～p.91)：手元の情報はカリブーを絶滅させているのはオオカミであるという。カナダ政府がハンター・罾師・商売人から得た情報。今や6月末、カリブーは北方の荒野に。オオカミは何を食べているのか。答えはネズミ。アンジェリンが実際に見せてくれた。2, 30匹を飲み込み、巣穴に帰り半ば消化したものを子どものために戻す。マイクの親類オーテクもオオカミはネズミをたべると教えてくれた。著者は150箇所をネズミ捕りを仕掛け、ジョージも同じところでネズミを獲りに。ジョージが罾に足を噛まれてしまったが、これもオオカミがネズミを食べていることを示すものと考えられる。

ネズミ料理 (p.92～p.99)：カリブーの殺戮者オオカミが、ちっぽけなネズミでお腹を満たしていたとは、しっくりしない。政府に報告しても、一笑に付されてしまうに違いない。どうすれば信用してもらえるか。考えた末、自分自身が実験台に。自分もネズミでお腹を満たし、自分の健康状態を見極める。ネズミのクリーム煮を考案。初めは内臓を捨てていたが、どうも油っぽいものが食べなくなったので内臓も全部使うことに。結果は大成功。オオカミの食料はネズミであることが立証された。オーテクに自分の使命を話すと、大変に関心を示してくれた。オーテク自身の救いの霊がオオカミであったから。五歳のときに24時間オオカミの巣穴の中に置き去りにされて、オオカミの子どもたちと遊んできたとのこと。いよいよ著者のオオカミに対する確たる見方が作られて来るのであった。

エスキモー神話 (p.100～p.106)：オーテクはオオカミの食生活について教えてくれた。ハタリス・ジリス・カワマス科の魚・ホッキョクカジカなども食べる。オオカミとカリブーの関係を明快に示す神話も。オオカミとカリブーは一体。オオカミは病弱なカリブーを食べてカリブーの群れ自体を強くしている。太った美味しいカリブーを殺すのは自分たち罾師であるとマイク。14匹の犬を養うために一週間で2, 3頭、一年間で2, 3百頭以上。この地域に1,800人の罾師。罾師数と、殺すカリブーの数を半分にして掛け合わせても、毎年十一万二千頭のカリブーが殺されている勘定。このような伝聞証拠を得ながらも著者は自分自身による直接的な証拠を得ようと決心するのであった。

オオカミの通訳 (p.107～p.115)：オオカミは多種の言葉を「話す」。遠吠え・悲しげな声・震え声・くくん鳴く声・などなど。著者には聞こえないオオカミのコミュニケーションもオーテクは聴き取れるよう。例えば「カリブーがやがてやって来る」とか「エスキモーが数人やって来る」とか。著者はそんなことには騙されない、と思っているが結局そのような状況が訪れるのである。どうやら彼にはオオカミ語が解る様である。

引越し (p.116～p.123)：オオカミの子たちが「大きくなったが親について行くにはまだ若すぎる」状態になったとき、元の巣から半マイルほどの溪谷に引越す。アンジェリンが一匹ずつ咥え移動。雄たちが見張る。新しい場所は小さな流れや野ネズミの沼地もあり、子たちの狩の勉強にはうってつけ。オーテクによればオオカミは犬よりも長生き。孤児を別のオオカミが引き取り育てる。人間の子は無力で、オオカミが育てる事は無理だが、オオカミの子を人間が育てる事は可能。そのような事例を二つは知っているという。

第4日目：8月5日

エスキモー犬との恋愛 (p.124～p.132)：夏、カリブーの群れと共にマイクもエスキモー犬も帰って来た。ハスキー犬の雌は一年中発情。オオカミの性生活に関しては交尾期間は三ヶ月で良いチャンスに恵まれず。雌のハスキー犬コオアとアルバートを近づけた。首尾は上々。初めコオアをワイヤーに繋げていたが放してやった。結果は上々。二人は自分たちの世界に没入。数日後コオアが元の犬の鎖のところに戻る。アルバートの吠え声は今や円熟した落ち

着いた響きが。その満ち足りた声をやっかんで齒軋りする著者。

母子の情愛 (p.133～p.137)：4匹の子たちも大きくなり4, 50センチ。元気に遊ぶ。アンジェリンが胃の中のを戻して子たちの朝食の始まり。食後ののんびりとした時間。突如著者のオナラが溪谷に轟く。アンジェリンが音源を辿り著者の近くに。オナラが出続ける著者。軽蔑した表情で子を先にしながら巣の中に消え行くアンジェリン。

遊びと訪問者 (p.138～p.145)：ぐっすり眠のアルバートにジョージが不意打ち。二人で追跡ごっこ。アンジェリンも参加。明らかに遊ぶ。ある夜アンジェリンが留守番。見慣れぬ2匹のオオカミの訪問。用心していたアンジェリンも打ち解け挨拶を。1匹の方が子たちの穴の中に。20分程で2匹は去る。オーテクの言うには、オオカミも人間に同じく訪問しあう。マイク、その2匹のオオカミはアンジェリンの母親と妹に違いないと。

病気のオオカミ (p.146～p.153)：7月中旬、本来の使命を果たすべくカリブーを追ってオーテクと長旅に。それまでの当局の調査ではオオカミは三万頭だが、著者の計算によれば三千頭程。カリブーの数が減ると一回に産むオオカミの子の数が少なくなる。エサが取れぬと潜伏していた狂犬病ビールスが飢えた狐の間に広がり、オオカミにも移る仕組み。狂犬病に罹ると危険を感じる事ができなくなり自動車や列車に突っ込む無謀な振る舞いに陥る。それを「攻撃」と感じた人間により凄惨な殺戮者のイメージが作られる。凍った平野を逃げ惑うロシア人のトロイカがオオカミの襲撃に押しつぶされるなどの話が広まる。付近一帯、軍隊を動員してのオオカミ狩りをして、オオカミは捕まらず、ハスキー犬やアメリカの兵士と帰宅の遅いインディアンなどが自警団のせいで死傷する始末。

カリブーを襲う (p.154～p.161)：一向にオオカミはカリブーを襲わない。カリブーもオオカミが側に来ても平気で草を食んでいる。オオカミもカリブーもカリブーの方が足が速いことを知っているから。子も健康ならばオオカミより速い。一向に襲い掛からない事に業を煮やした著者、日光浴をしていて全裸であることを忘れて、カリブーの群れの中に飛び込む。「狩はこのようにやるのだ」とオオカミに教えるつもりで。カリブーが、オオカミではなく、著者の異様な姿にパニックを起こす。オオカミは食

べる必要が無い場合は狩をせず、仕留めた餌は余すところなく食べ尽くす。無駄な殺生はしないのであった。

第5日目：8月6日

狩のやり方 (p.162～p.170)：弱い個体を選別するような攻撃を行う。何頭かのオオカミが弱い個体を群れから離して包囲したり、待ち伏せをしているところに別のオオカミが追い込みりレー方式も。オオカミは無駄なことはしない。「カリブーはオオカミの餌になるがカリブーを強くしているのはオオカミ」。オオカミがすっかり食べ尽くしたカリブーの残骸をみると何らかの疾病が認められる時が多い。早晩死ぬ運命にあったのである。

子どもの学習 (p.171～p.178)：空腹でない時にはカリブーをオオカミは襲わない。カリブーも知っているのでオオカミが居ても悠然と。午睡の時にジョージはアンジェリンを誘い子たちの狩の練習を計画。ジョージが子たちの見張り。3匹のオオカミはカリブーの中を走り回りカリブーの群れを挟み撃ちにする陣形を敷く。次に子を変えて12頭の雌と7頭の子からなる一群に的を絞り追う。カリブーがスピードを上げて走り始める。子オオカミも追いかけて群れの中に。戻ってくる子オオカミ。追いつくのは無理。へとへとになって戻ってくる狼たち。心地よい昼寝。これが子たちへの狩の学習であった。

糞の科学 (p.179～p.187)：帰国が迫り幾つかの遣り残した仕事。一つが「植生」調査。これは3つの部分に。(1) この地方の植物の収集 (2) それらの植物の占める割合「生育密度」の割り出し (3) 植物の栄養価の分析。著者にとり幸せなことに (1) (2) の大変な作業で使用する機器をオーテクのせいで紛失してしまったので、オオカミの糞の分析をする。二つのバケツに水を満たし、収集しておいた大量のオオカミの糞をその中に。毒ガスマスクをかぶり、メスで糞を刻みながらの作業。著者の周りに、いつの間にか十数人のエスキモーたち。異様な著者の様子に興味と恐怖を抱く。マスクをしたまま挨拶したため一層彼らは驚く。エスキモーをもてなすために、お茶の用意をするが、糞の浸してあったバケツで水を汲みお茶を沸かしたものだから、いつの間にか誰も居なくなってしまった。糞のほぼ48%はげっ歯類の遺骸。大部分は門歯と毛。カリブーの骨と毛。二三の鳥の羽毛。船員の服の真鍮のボタン。まさか船員をオオカミが食べたわけでもあるまい。

あっても不思議ではないのに、カナダの極北では人間を殺したオオカミの公式な報告はない。

オオカミを殺せ (p.188～p.195)：十月の末、カリブーはツンドラから森の世界に。十一月初旬から四月までオオカミとカリブーは寒帯林を一緒に移動。オオカミは冬には一つの群れになり、また分かれていく。森の中ではオオカミは色々な障害に会う。例えば狐獲りの罠。オオカミがこれにかかると罠は壊されてしまうのでオオカミには賞金がつく。オオカミは罠と毒ストリキニーネによって殺される。その他の方法は飛行機で追い回し散弾銃で仕留める。オオカミによって殺されたカリブーの数は色々と報告されるが、人間によって殺されたオオカミの数は話題にも上らない。オオカミには尾鰭がつき、偏見は肥大。商人が大変な剣幕で著者のところに。「湖の氷の上でオオカミに殺されたカリブーが五十頭もいるぞ」。著者が駆けつけると、それは銃で撃たれたカリブーの死体で全部で二十三頭。その内の三頭中の二頭は雄で頭がなく、もう一頭は若い妊娠した雌で後半身がそっくりない。二年前、カナダ州政府観光局はアメリカの金持ちハンター誘致のため、カリブー狩の「サファリ」計画を立てた。一回千ドルで最高級のカリブーの角一そろいが保証された。飛行機を旋回させカリブーの群れを湖の真ん中に追い込み、機上からハンターが「立派なトロフィー(角)」を次々と狙い撃ち。その中から最高の角が選ばれ、後は捨て去られる。契約に「一頭だけ」とあるから。著者は関係当局に事件の顛末を報告したが、回答はない。ただ州政府はその後数週間してオオカミの賞金を上げて二十ドルにただけであった。

オオカミよ、なげくな (p.196～p.201)：ノルウェイの飛行機が捜し出してくれ帰れる目処が。チャーチルで広まっていたデマ—著者はロシアの浮遊基地の諜報機関員—が切っ掛けで、役所が著者を捜し当てた全くの偶然の結果。最後の仕事(オオカミの巣穴の構造などの調査)に。オオカミの不在時に巣穴を訪れた。暗い巣穴を懐中電灯で探っていく。巣穴の奥のほうで薄明かりに浮かぶ4つの目。アンジェリンと一匹の子どもオオカミ。うなりもせず、ひっそりと壁に身体を寄せている。恐れ戦く著者。銃を持っていたら発射したかも。汗をかきながら静かに入り口に後ろじさりする。出口から出てほっとしたとき、自分が怯えた事が悔しくなる。人間としてのエゴをさらけ出させた獣に対する悔しさも味わう。

更に、飛行機の爆音をさけて棲家の奥にへばりついていたアンジェリンと子どもに対する恥ずかしさ。東の方でやや頼り気のないジョージの叫びが居なくなった家族を求めて荒野にこだましている。この声は著者にとっては「失われた世界」を告げる声。「著者が垣間見て入りかけた世界・・・ついには自らはじき出された世界を呼ぶ」声であった。

エピローグ (p.202)：1959年の五月はじめ、カナダ野生生物局から派遣された捕食動物調節専門員の一人が、著者のかつてのキャンプ地である狼屋湾に着陸。しばらく留まり、狼の存在を確認後、棲家の近くに青酸の「狼殺し」を幾つか置いた。また、ストリキニーネの餌もいくつかばら撒いた。結果はどうか解らない。

訳者あとがき (p.203～p.206)

5. 結果・考察

表1に46の形容詞対に対する初日と最終日の評価結果が示されている。前述のように、得点は左端から1点、右端が7点である。統計的処理としては二日に関する平均値の差の検定(t検定)を行った。その結果46項目の中の約83%に当たる38項目で危険率5%以下の大きな有意な差が認められた。38項目中、30項目が有意水準0.000であった。演習と言う授業形態の下、グループワークを中心とした一週間の授業の結果、多くの受講生のオオカミに対する印象に非常に大きな変化が生じたことが明らかである。変化の方向はポジティブで好意的なものが大多数であった。かなり冗長になることを恐れつつ、有意水準0.000であった30項目を列挙してみよう。()内は対になる形容詞である。平均値の差の数字の大きなものから順次示すと、より友好的(敵対的)、よい(わるい)、情け深い(残忍な)、暖かい(冷たい)、誠実な(不誠実な)、おおらかな(卑屈な)、立派な(ひどい)、正しい(不正な)、かわいい(憎らしい)、丸い(角のある)、安らかな(不安な)、役立つ(役立たぬ)、優しい(厳しい)、理性的な(感情的な)、真面目な(不真面目な)、のんびりした(せっかちな)、気持ち良い(気持ち悪い)、明るい(暗い)、物覚えのよい(忘れっぽい)、すぐれた(おとった)、きちんとした(だらしない)、深い(浅い)、頼もしい(頼りない)、慎重な(軽率な)、こまかい(大まかな)、注意深い(不注意な)、やわらか(いかたい)、清潔な(不潔な)、大きい(小さ

表1 評定値の平均値の差の検定

評定項目対		1回目	2回目	差	危険率
40. 友好的な	— 敵対的な	5.07	1.88	3.19	0.000
17. よい	— わるい	4.70	1.72	2.99	0.000
42. 情け深い	— 残忍な	4.59	1.81	2.78	0.000
31. 暖かい	— 冷たい	4.49	1.76	2.73	0.000
28. 誠実な	— 不誠実な	4.03	1.38	2.65	0.000
18. 卑屈な	— おおらかな	3.47	6.01	− 2.55	0.000
24. 立派な	— ひどい	3.91	1.46	2.45	0.000
11. 正しい	— 不正な	4.13	1.73	2.40	0.000
37. かわいい	— 憎らしい	4.45	2.00	2.35	0.000
45. 丸い	— 角のある	4.97	2.80	2.16	0.000
46. 安らかな	— 不安な	4.47	2.31	2.16	0.000
27. 役立つ	— 役立たぬ	3.75	1.68	2.07	0.000
02. 厳しい	— 優しい	3.08	5.15	− 2.07	0.000
25. 理性的な	— 感情的な	3.67	1.65	2.02	0.000
30. 不真面目な	— 真面目な	4.32	6.19	− 1.87	0.000
43. せっかちな	— のんびりした	3.41	5.04	− 1.64	0.000
34. 気持ち悪い	— 気持ち良い	3.76	5.35	− 1.58	0.000
06. 明るい	— 暗い	4.26	2.69	1.57	0.000
01. 物覚えのよい	— 忘れっぽい	2.86	1.31	1.55	0.000
09. 陽気な	— 陰気な	4.34	2.79	1.55	0.001
21. すぐれた	— おとった	2.76	1.24	1.52	0.000
44. きちんとした	— だらしない	3.51	2.01	1.50	0.000
29. 深い	— 浅い	3.26	1.78	1.48	0.000
35. 頼りない	— 頼もしい	4.91	6.37	− 1.47	0.000
41. 軽率な	— 慎重な	5.23	6.31	− 1.08	0.000
32. こまかい	— 大まかな	4.11	3.09	1.01	0.000
36. 幸福な	— 不幸な	4.62	3.66	0.96	0.002
39. 不注意な	— 注意深い	5.58	6.51	− 0.94	0.000
05. かたい	— やわらかい	3.32	4.25	− 0.93	0.000
12. 静かな	— 騒がしい	3.75	2.99	0.76	0.001
19. 臆病な	— 勇敢な	4.69	5.43	− 0.74	0.002
33. 清潔な	— 不潔な	3.88	3.19	0.69	0.000
16. 大きい	— 小さい	3.31	2.66	0.65	0.000
10. はやい	— おそい	1.91	2.51	− 0.61	0.000
08. 個性のない	— 個性的な	5.41	5.95	− 0.53	0.009
23. 意欲的な	— 無気力な	2.74	2.23	0.51	0.004
22. 地味な	— 派手な	3.95	3.50	0.45	0.011
20. 積極的	— 消極的	2.85	2.43	0.42	0.022
04. 敏感な	— 鈍感な	2.28	1.88	0.40	0.108
38. 内面的な	— 外面的な	4.15	3.83	0.32	0.141
07. すばやい	— のろい	1.78	2.10	− 0.32	0.073
14. 病弱な	— 元気な	5.51	5.78	− 0.27	0.079
26. 強い	— 弱い	2.26	2.04	0.22	0.135
13. 鋭い	— 鈍い	1.91	2.00	− 0.09	0.580
03. 不活発な	— 活発な	5.96	6.03	− 0.07	0.685
15. 若い	— 老いた	3.47	3.46	0.01	0.936

い), おそい (はやい) 方向への大きな変化が見て取れる。

6. 今後の課題

今報告では専ら平均値を取り上げたが, 一人一人の受講生がどのような変化を辿ったのかを, 学んだ内容との関連の上で丁寧に跡付けることが前回からの継続的な課題として残されている。

註

- * 1 後出のテキスト紹介にもあるように, 本書はカナダの一生物学者によるドキュメントである。カリブーが激減する原因はオオカミにありと考える政府から, その証拠を挙げるよう命をうけてツンドラ地帯に旅立った著者がそこで見たものは, 余計な殺戮を決してしない潔 (いさぎよ) いオオカミの姿であった。寧ろ, ネズミなどの小動物を餌にするなど予想だにしない食性を目の当たりにする。結局カリブーの激減の原因は, 賞金目当ての罾猟師と立派な角目当ての商人・観光客たち人間であったことを突き止める。一年間ほどの滞在中で徐々にオオカミに対する著者の偏見が剥がされて行く様子も良く描かれている。なお本著者は「マックー犬になりたくなかった犬」「霧の中のゴリラ」(ダイアン・フォッシーを描いたもの) などの著書でもあり, 軽妙な筆致の持ち主でもある。
- * 2 自然保護運動家で俳優でもあるティモシー・ダルトン (英国) が野生のオオカミの生態を求めてアメリカとカナダを旅する。最後の場所が今回のテキストの舞台であったカナダ極北のツンドラ地帯。そこで遭遇した白いカナダ極北オオカミは人を恐れず, 親オオカミの見守る中で子どもオオカミは主人公の靴を嗅ぐぐらいの側まで近づいてくる。驚きと興奮を隠せぬ主人公。主人公たちの遠吠えに呼応するオオカミたち。冷血で残忍なオオカミの姿はどこにも見つけられない。
- * 3 女優の大桃美千代が道東を巡る番組。各地の名物を巡り, 標茶に至る。そこの桑原牧場で

森林オオカミと極北オオカミと出会う。特に生後3ヶ月ほどの白い極北オオカミの子どもたちとの微笑ましい触れ合いが紹介されている。北海道の本来の自然とオオカミの関わりについての桑原氏の意見も紹介されている。

- * 4 上記 NHK の番組から2年後, 福本が桑原牧場を訪れ, 氏の主宰するネーチャースクールに参加。その後, 狼たちの様子を撮影。白いオオカミもすっかり成長し, 森林オオカミと共生している。
- * 5 オオカミは悪役のレッテルを貼られ易いが, 我が国では農地の守り神・魔よけとして崇められている。御岳山の周りにはオオカミの頭骨をご神体として大切に祀り・守り続けている家々がある。いざと言うときには, その骨を削って粉薬のようにして病人に飲ませていた。御岳山の南方の桧原村では明治の初めオオカミの乳を飲んで育った子どももいた。奥秩父の三峰神社の鳥居の前に祀られているのは狢犬ではなくオオカミである。
- * 6 最終日の「学習のうと」には2つの課題が用意されている。1つは, テキストに関する学習のまとめで「テキスト・プリント・VTR などから「あなたが学んだこと」を3点以内に簡潔に述べてください」と言うもの。もう1つは, 本演習の評価テストで「今回の演習を通じて「あなたの裡 (うち) にある偏見について気付かされたこと」について述べて下さい。」と言うものである。

引用・参考文献

- 1) 福本 俊: オオカミに関する心理学的研究 (1) — Wolfology 事始め —, 日本心理学会第46回総会発表論文集, 415, 1982
- 2) 福本 俊: Wolfology に関する授業研究—受講生は先入観を如何に変えて行ったか—, 女子大紀要 (家政), **57**, 41-51 (2010)
- 3) 福本 俊: Wolfology に関する授業研究—2— —受講生は先入観を如何に変えて行ったか—, 女子大大学院紀要, **16** (2010)